

はじめに

筆者らは、医科系の大学で長年パソコンを使用した情報リテラシー教育を行ってきたが、医療の専門職を目指す学生に対してどのような情報リテラシー教育が必要か、現在でも試行錯誤を重ねている。医科系学生の入学時のパソコンの処理能力は、学校によって違いがあると思われるが、小・中・高校でIT教育が十分に行われているとされている最近でも、アンケートやヒアリングなどの調査によるとほとんどが初心者に近いようである。本学でのパソコンによる情報リテラシー教育は、コンピュータ（パソコン）の初歩的演習教育にならざるを得ず、「大学において、また将来医療従事者として勤務した時、コンピュータ（パソコン）を操作できる基礎的能力を身につけさせること」を教育目標としている。このような教育目標を達成するための教育内容をどのようなものにするかは論議を呼ぶところであろうが、「基本ソフトの操作概要、ワープロソフトによる文書作成、表計算ソフトの操作、プレゼンテーションソフトの基本操作、インターネット・メールの利用法」としても大きな誤りはないであろう。

筆者らは、2009年に情報リテラシー教育用の教科書として『医療・福祉系のための情報リテラシー』を執筆した。内容は、Windows Vista、Office 2007の基本操作を解説したものである。医科系大学は実習・演習が多く、入学してすぐにも実習や演習のレポート作成が要求される。レポートはその内容はもちろんであるが、迅速かつ正確に見やすく作成することが必須であり、ワープロ・表計算ソフトを利用しての提出が求められる。したがって、『医療・福祉系のための情報リテラシー』では医療・福祉系大学で作成しなければならない、生理学、病理学、解剖学などの実習レポートなどを、文書や表の例として提示し、それらを完成させる操作を学ぶことにより、実際の文書や表を作成することへの即時適用を図るものであった。しかしながら、現在OSはWindows8.1であり、またOfficeはOffice2013にバージョンアップしている。操作上の違いが顕著になったことから、Windows8.1、OfficeはOffice2013の内容に則した本書『医療・福祉系学生のためのコンピュータリテラシー』を発行することになった。

医科系・福祉系学生といえども医療・福祉職に従事した時、ワープロ・表計算・アプリケーションパッケージ（医事システム、オーダーリングシステムなど）などでパソコンを使用することが要求される。また、さらに高次のコンピュータ処理を求められるかもしれない。現代社会においては、望むと望まないにかかわらずコンピュータの利用は必須のものとなっている。

本書は、実社会（特に医療・福祉職として）でコンピュータを利用・操作するうえで最も基本的な知識（コンピュータリテラシー）を提供するものである。コンピュータを使ってデータ処理を行うには、ある程度のことは表計算ソフトで可能であるが、複雑かつ高度の処理を行うには、VB（Visual Basic）などのプログラムの知識が必要となる。医科系・福祉系大学においても一部の学科では、音声分析、画像処理、信号処理などで高度なコンピュータ処理を要求される。これらの学科の学生諸氏、あるいはコンピュータを深く知りたい人は本書をマスターしたうえでプログラミング言語の学習を勧める。

2015年2月

著者代表 樺澤一之